

囲碁に学ぶ大局観(シリーズ)

第8回：光風霽月

囲碁の上達のための手段として、プロ棋士の名局を碁盤上で一手一手並べることによって石の形や石の流れの美しさを経験することが大変有効とされています。プロの着想や着手の意図を100%理解出来なくとも、繰り返し並べることによって石の流れや手筋に触れることで予測と異なる着手に脳が良い刺激を受けるということでしょう。急がば回れの手法ですが、楽しみながら着実な棋力アップに加えて物事を決断する力も培うとプロ棋士や高段者が推奨する勉強法の一つです。

碁盤上に展開される美しい石の形に関し、『小川誠子の石の形を美しく (NHK 出版)』の中で小川プロも、“……石の良い(美しい)形とは、一言で言えば石が本来の力を十分に発揮し、働いている状態を言います。逆に、石の姿形が良くないということは、それだけ効率の悪い打ち方をしているということになります。良い形を心掛ければ、碁の内容が変わってくるはずです。もちろん結果にも影響することでしょう。……”と説いていますように、対局者はもとより観戦者の目にも美しい石の形は、ムダが極限まで排除された至芸と映るからだと思います。

今回のテーマ「光風霽月」は、物事にあまり拘らず、すっきりした心の美しさを形容する中国の言葉です。美しさは森羅万象や人間活動すべてに内包されており、その美しさによって感動を覚える側の感性を表した格言ですが、その感動を与えてくれるものには形の見えるものと見えないものがあります。見える美しさには、芸術、スポーツ、景観などなどがあります。目に見えなくとも感動を与えてくれる美しさは、人の言動から感じ取るものです。例えば、東日本大震災発生直後の津波の来襲と高台への避難を最期まで叫び続けた宮城県南三陸町防災放送の遠藤未希さん(24)の決死の姿勢は、人としての究極の心の美しさの表れと世界の人々の感動と涙を呼びました。極限状態に追い込まれて咄嗟に体现された美しい人の行動です。他方、地中海クルーズ中の大型客船コスタ・コンコルディア号の座礁・転覆事故の際の船長の言動や所属企業の対応には、遠藤さんとは対極にある“人間の醜さ”として世界の心を痛めました。

美しさに対する感性は、脳科学的にも前頭皮質が受ける刺激として確認されています。そして喜びの感情や決断力なども触発されるようです。特にA1野と言う部位は、美しさに反応し血流が盛んになると言う分析(石津智大氏とセミール・ゼキ氏の論文)がありますように、美しさは人間が第六感(直感・インスピレーション)で感じ取る物事の本質であろうと思います。従って、棋力は囲碁に限らずあらゆる領域における美しさを体感することによっても向上すると言うことでしょうか。

光風霽月の様は国の有り様にも存在します。先般国賓として来日されたブータンのワンチュク国王は、1972年に国民総幸福量{GNH(Gross National Happiness)}と言う概念を提唱されています。それは、GDPで測る物質的豊かさのみを目指すのではなく、精神的な豊かさの向上を図ることこそ真の幸せを齎すものと言う考え方です。GNHは、心理的幸福、健康、教育、文化、環境、生活水準など9つの側面から総合的に評価される指数です。ブータン政府はGNHの増大を政策の基盤に据え、政府はそれに沿った施策を主導しています。そして2005年5月末に初めて実施された国勢調査では、「あなたは今幸せか」という問いに対し、国民の95%以上が「幸福」であると回答したそうです。異なる宗教や言語を持つ人口200万人あまりの小国とは言え、国王の理念、人

柄、そして強いリーダーシップから生み出される美しい国の有り様で、敬服と羨望を禁じ得ません。

囲碁は、万事に応用可能な本質的価値判断能力の向上や感性の高揚を楽しみながら体得するための有力な手段ですが、残念ながら戦後漸減傾向にある日本の囲碁人口が気になります。現在およそ600万人強とされていますが、ネット碁の普及で何とか囲碁愛好者の数を確保維持しているようですが、本来あるべき姿の対面対局が激減(経営困難が理由)していることも事実。特に若者(30代未満)世代では、対面プレイよりもネット対局により強いインセンティブを感じるような気がします。それは、対局のスピード感、自宅に居ながらにしてプレイできる利便性、さらには経済的理由などが主因でしょう。こうした状況を反映して、多くの碁会所や地域コミュニティでの囲碁サークルは、高齢化の進展で運営の先行きの不透明感が深刻になっています。

大都市の一部では、若手プロ棋士やインストラクターたちが多様な試み(例えば、料理教室など囲碁以外のイベントとの組み合わせや囲碁を敢えて前面に出さない機関紙発行など)にチャレンジすることで、所謂“碁ガール”を発掘し隠れたブームになっていることは喜ばしい限りです。子供囲碁教室の活性化に関しても、こうした工夫や新しい組織モデルが世代を超えて次々に誕生し、日本囲碁界の底上げに寄与することを願っています。

囲碁を通して大局観を身に付けた若者の増大は、日本の国力にも好影響を齎すものと確信します。ただ、留意すべき点として、脳科学・心理学者が指摘していますように、若年層がネットに長時間没頭することは精神面での健全な発達を徐々に阻害すると言う警告にも真摯に耳を傾ける必要があります。しかし、対面対局はむしろ健全な脳の発育に資することは証明された事実(日本棋院と東北大学の共同研究)ですから、東西両棋院がこうしたメリットとデメリットに関する正しい情報と健全なあるべき姿をもっと積極的に広報発信し、支援して欲しいものです。加えて、壮年層(40~50代)の男性の減少が顕著な事実をどう改善すべきかなどの魅力的な方策も発信する必要があります。各界のリーダーたちがこの壮年層に集中していることを考えますと、政治、経済界の指導層の戦略的思考にも影響が出始めているのではと危惧を感じます。

さて、日本人の美意識の根底には、侘・寂(わび・さび)があると言われます。それは、室町時代中期に開花した東山文化と総称される中でも特に、茶道に根付いた美学で、美しさを受け入れたり創造したりするときの心の働きを意味します。簡素の中に見出される美意識で、禅宗の影響もあるとされます。囲碁の世界でも、「大竹美学」と称される大竹英雄プロの棋風は、形がシンプルなものの中にも整っていて、しかも変幻自在な打ち回しは、侘・寂の美学を盤上に体現していると言えます。手段はともあれ、光風霽月の心に幼少時代から無理なく自然に接する人口が拡大すれば、個人レベルを超越し、国柄にも好影響が表れること必定でしょう。

<以上>

2012年2月

足立敏夫

「囲碁と経営」研究家